

アラサー女子の異世界就職記  
〜雑学スキルで挑むお仕事改革!〜

# 登場人物紹介

characters

## アウレリウス

北の要塞町「ウィンダニウム」に拠点をかまえるドリファ軍の軍団長。魔法を使いこなす司令塔。

## ユーリ

女子高生の代わりに異世界へ転移したアラサー女子。『雑学』のスキルを使って冒険者ギルドの倉庫係として働き始める。

## シロ

魔の森で出会った犬。でも実は……？



## ナナ

冒険者ギルドの経理担当。ユーリと出会う前までは口数少なく暗い性格だったが、ユーリの前向きで明るい性格に影響され徐々に明るくなっていく。

## ティララ

冒険者ギルドの受付嬢。ユーリが異世界に転移してから初めてできた友人。とても明るい冒険者ギルドの看板娘。



## ユッタ

冒険者ギルドの荷運び人。倉庫の整理を発案したユーリに反発していたが、彼女の頑張る姿を見て心を入れ替える。



## ユリウス

明るく少々キザっぽい所のある青年。年上の女性が好みだが、ユーリの事は自分より年下と思っている。冒険者として放浪し久しぶりに街へ帰還した際ユーリと出会う。

## ファルト

魔物の肉を使った屋台を開こうと考えている男子。ユーリと共に魔物肉カレーの開発をする。



# \アラサー女子の/ 異世界就職記

1

灰猫さんきち / イラスト 珠梨やすゆき

~雑学スキルで挑む  
お仕事改革!~

## 目次

序章 異世界転移は突然に	006
プロローグ	006
第一章 ゴチャゴチャ倉庫はカオスの巣	028
北の要塞町	028
冒険者ギルド	036
孤軍奮闘	076
心も整理しましょう	094
最後の仕上げ	112
幕間 生まれ変わった倉庫	123
第二章 魔物のお肉とカレー作り	134
魔物肉との出会い	134
金の彼と銀の彼	173
魔の森へ	189
白い子犬	213
夏至祭	247
番外編 ユーリのプレゼント	263

🐾 プロローグ 🐾

ユーリの目の前には、得体の知れないガラクタの山があった。

学校の体育館ほどもある広い倉庫の中に、スライムの核を乾燥させたものとか、森トカゲの尻尾<sup>ぼ</sup>だとか、月下草の葉っぱなどが雑然と積み上がっている。

暑苦しい気温とじめじめの湿気が室内にこもって、ガラクタたち——否、大事な商品である素材の数々——から立ち上る臭いと混ざると、それはもうひどい有り様だ。

「これを全部、在庫確認かあ……」

思わずユーリは遠い目をした。

蒸し風呂のような中で、一つにまとめてお団子にした髪のうなじが既に汗をかきはじめている。

でも、諦めるわけにはいかない。これが彼女の仕事である。

生きていくためには仕事が必要。それがどんな場所でも、どんな内容でもだ。

よし、と一つうなずいて、ユーリは手に力を込めた。

まずは手近な場所から、少しずつでも確実に進めていこう。そう決意しながら、作業を始めた。

普通の会社員だったユーリが、どうしてこんな目に遭っているのか。それは今から数ヶ月前の事件がきっかけだった――。



ユーリこと山岡悠理<sup>やまおかゆうり</sup>は今年で二十七歳。大学を出て五年目になる会社員である。

就職したのは、地元の小さな食品メーカー。職場でのトラブルもなく、経理と営業事務の二足のわらじで仕事を回してきた。

五年目ともなれば仕事は慣れたもの。

何の問題もなく、代わり映えなく……ユーリは平坦な日々を送っていた。

「頼りにしているよ、山岡さん」

ユーリは仕事熱心で、周囲からの信頼が厚い。人の役に立つのを誇りとしていた。

だから彼女は、今の環境に満足していた。

いつまでも「今」は続かない。

ユーリ自身は変わらなくとも、周囲は少しずつ変わっていく。二十代後半ともなれば友人たちは結婚ラッシュユダ。

それでも明日は今日と同じ日。その思いから抜け出せないまま、ユーリは暮らしていた。

ある晩冬の夜のことである。

残業を終えたユーリは、歩き慣れた道を通って家に帰ろうとしていた。

(そろそろ月末が近いから、ちよつと忙しくなるね。頑張ろう)

そんなことを考えながら、冬の夜気の中を歩いていく。

考え事をしていても、ここは毎日歩く道。迷うはずもない。

時刻は夜九時を回ったばかり。

早くもなく遅くもない時間だが、住宅街は意外な静けさに包まれていた。

ふと、向こう側から人影が近づいてくる。冬用のコートを着けていても分かる、華奢で小柄なシルエツト。

高校生に見える少女が、マフラーに顔を埋めるようにして歩いていた。

スマホのイヤホンから漏れる、英語のリスニングの音。イヤホンの耳元にふわふわの白い毛玉が揺れていた。若い女子に人気の小犬のマスコットだ。

(頑張ってるなあ)

ユーリは素直に感心した。彼女にとって受験勉強はもう十年も前のこと。

年下の子が勉強に励んでいる姿は、微笑ほほえましかった。

女子高生と歩み寄り、すれ違う。通り過ぎた彼女は、英会話の旋律と一緒に遠ざかっていく……はずだった。

突然、強い光が辺りを覆った。

街灯とも月光とも違う不思議な光が、明滅している。

とっさに振り向いたユーリの視界で、少女がもがいている。地面の光が波打って、彼女を呑み込もうとしていた。

光はくるくると回り、魔法陣のような複雑な模様を描いている。

「た、助けて……！」

女子高生と目が合った。片方が外れたイヤホン、白い毛玉が震えている。

「もちろんよ！ さあ、手につかまって！」

ユーリは迷いなくバッグを放り出して、伸ばされた手をしっかりとつかむ。つかんで、引っ張る。年下の子に助けを求められて、ためらうユーリではなかった。異常事態への驚きは、目の前の少女を助けようと集中したために、心から追い出された。

ところが少女は動かない。見れば、光の地面に足が沈みかけている。足首まで絡め取られている。少女の目に涙が浮かんだ。恐怖に表情が歪む。

「こうなったら！」

ユーリは一度手を離して、少女に体当たりをした。その勢いで女子高生の足は地面から抜けた。少女は光る地面の外に出て、しりもちをつく。

（良かった。私も逃げなきゃ）

ところが今度はユーリの足が動かない。先ほどの少女よりも深く、膝下まで光に吞まれている。

「お姉さん！ 早くこっちに！」

少女が必死に手を伸ばしてくる。けれどユーリはその手を取れなかった。

光はユーリを絡め取って、腰まで胸まで肩まで呑み込んでしまう。

(あ、これ、やばいかも)

そう思ったとき、既に声は出なかった。口元まで沈み込んでいた。

光る地面はユーリを全て腹の中に収めた後、唐突に元に戻った。

地面はただのアスファルト。光の残滓すらなく、波打っていた形跡もない。

ただ一つの痕跡は、放り出されたユーリのバッグ。それから呆然としている女子高生。

消えた者と残された者。こうして彼女らの運命は分かたれた――。

――開け、開け、異界の扉。

――来たれ、来たれ、異邦の旅人。

――異世界の扉をくぐり、この地に降り立つべし。

ユーリは落下している。光に吞まれて以来、時間の感覚をなくして落ち続けている。

どこか遠くで歌声が聞こえる。高く低く、さざなみのように響いている。

と。

ある地点で位相がぐるりと反転した。落下は上昇に変わり、ふわりと引き上げられる感覚がある。

奇妙な浮遊感の後、急に足元がしつかりした。

気がつけばユーリは、石造りの建物の床に立っていた。

「成功だ！ 異世界からの英雄召喚に成功したぞ！」

ユーリは十人ほどの人に取り囲まれていた。みな、フードを被<sup>かぶ</sup>っていて顔はよく見えない。

がらんとした空間は広くて、声が反響している。空間を囲むように柱が並んでおり、どこか神殿を思わせた。

やや薄暗く、明かりは高い天窓といくつかのかがり火があるだけだ。

ユーリは足元の床を見た。そこに描かれている模様に見覚えがあった。

——これは、あの光の模様。

「英雄殿！ ようこそ我らがオプティムス帝国へ」

ユーリが無言のまま立ち尽くしていると、一人の男性が近づいてきた。まだ若い、二十歳<sup>はたち</sup>になつてない年頃に見える。

布を巻き付けたような見慣れない服装をしている。ユーリは何となく、古代ローマや古代ギリシアを連想した。

「なんと、英雄殿がこのような女性だったとは。もっと勇猛な男性を想像していましたが……」

彼は頬を上気させて、少年のように純粋な瞳でユーリを見つめている。

「しかし、門の神の選定に間違いはない。英雄殿よ、あなたはどのような武器が得意ですか？」

問われて、ユーリは返答に困った。彼女は武器など持ったことがない。中学のとき、剣道部の体

験入部で竹刀しなを握ったくらいだ。しかも結局剣道部には入部しなかった。

「武器の経験はありません」

仕方なく正直に言くと、若者は面食らった顔をした。しかしすぐに立て直して続ける。

「なるほど、魔法使いでしたか。どの属性の魔法を使うのです？ 炎？ 風？ 癒やし？ それとも全てを!?」

こいつはふざけているのだろうか、とユーリは思った。

「……魔法は使えません」

当たり前でしょうがと心の中で付け加える。

「なんだと。——おい、アウレリウス」

「はい、皇子殿下」

若者が呼ぶと、控えていた人々の中から一人が進み出る。二十代後半と思おほしき背の高い青年だった。金の髪と紫の目が、かがり火の照り返しを受けている。

服装は他の者と変わらなかったが、フードの奥の目つきは鋭い。冷徹な眼差しに一瞬、ユーリは気け圧おされた。

「『鑑定』してみろ」

「既に済んでおります。——スキルは『雑学』。それだけです」

「……はあ!？」

冷静に告げた声に、皇子は大げさに頭を抱えた。

控えている神官たちもざわめいている。

「そんな馬鹿な。門の選定で選ばれた異邦の英雄だぞ！ 雑学だと？ あり得んだろうが！」  
「と、言われましても。私の『鑑定』スキルは確かにそれのみと告げています。……そうだな、その異邦人よ」

「は、はい」

アウレリウスの紫の目で見つめられて、ユーリは内心でぎくりとした。

「武芸の腕はなく、魔法も使えない。戦うすべを知らないと解釈してよいか？」

「はい。何と戦うのか知りませんが、私はただの無力な一般市民です」

「では『雑学』に心当たりは？」

「ええと……」

ユーリは首をかしげた。

彼女は幅広いジャンルの本を読むのが好きだ。また、知らない話を聞くのも好む。知らないことを知るのを楽しんでいる。

そういうえば、そのおかげで小学生のときは『雑学王』なんて呼ばれていたっけ。

「人より色んなことに広く浅く詳しいとは思いますが」

「ふむ。例えば？」

しつこく突っ込まれてユーリはうんざりした。先ほどから意味不明な状況で疲れているのに、まだ続くのか。

「例えば、冬のブーツのニオイ対策に、十円玉をいくつか入れておくとよいですよ」

「十円玉とは？」

あ、外国の人だから十円が分からないのか、とユーリは思った。

「銅貨の小銭です。銅は消臭効果があるので、ブーツの臭いニオイをやわらげてくれます」

「……………」

「……………」

広い空間に妙な沈黙が落ちた。みな、戸惑った顔で黙っている。

「……………もはや間違いないだろう」

しばらく後、重々しい口調でアウレリウスが言った。片手で額を押さえて、金の髪がこぼれている。

「此度の門の選定は失敗した。この女性は雑学に長けているだけの、ただの一般人。……………よろしいですね、皇子」

「そ、そんな……………異邦の英雄を喚ぶために、どれほどの時間と資材を掛けたと……………」

彼はがっくりと膝をつく。いつそ気の毒な様子だったが、ユーリは同情しない。彼女こそ巻き込まれていい迷惑なのだ。

アウレリウスが説教じみた口調で言う。

「このような奇手に頼らず、正攻法で武功を挙げた方が早いでしょう」

「う……………うるさい！ あらゆる可能性を検討するのが指導者たる者の素質だ！」

「それは一理ありますが、失敗を認めて次につなげるのも必要です」

「わいわいと言いつつ二人の男性を、ユーリと他の人々は呆あきれて眺めた。

しばらく様子を見ていても、言いつつは終わらない。そこでユーリは言ってみてみた。

「あのー、すみません。私、もう帰っていいですか？」

するとピタリと言いつつは止まった。皇子とアウレリウスに見つめられて、ユーリはちょっとたじろぐ。

皇子は苦い顔をしてアウレリウスの脇腹をつつく。お前が言え、と言っている。

アウレリウスはため息をついて一歩、進み出た。

「異邦の旅人よ、大変申し訳ないが……。あなたを元の場所に帰してやるのは不可能だ。異世界の門は入ることはできても、出ることはできないのが定め」

「……は？」

「こちらの都合で呼び立てた以上、生活の保障はしよう。その他の要望もできる限り聞き入れる」

「……………はあ？」

後ろの方では神官たちが「ほら、だから門の選定なんてやるべきじゃなかったんだ」「皇子殿下がどうしても言うから」「でもお前だって異世界の門の奇跡を見てみたいとか言ってたじゃん」「ちよ、おま、今そんなこと言うなよ！」などとヒソヒソしている。全部聞こえている。

「私、仕事があるんです。もう月末だから忙しいの。私が黙っていなくなったら、会社の人困るんです！」

ユーリは言った。叫ぶような口調だった。

「家族だって、友だちだっている！ 急にいなくなったら、どれだけ心配させると思う!?!」  
皇子につかみかかる。

「うわ、旅人殿、落ち着いて」

「これが落ち着いていられますか——!!」

石造りの神殿に、ユーリの絶叫が響き渡った。

ユーリとて『雑学』なるスキルが発現する身である。

ここが外国などではなく、いわゆる異世界であることは薄々気づいていた。

だいたい、言葉が通じるのが不思議だった。

アウレリウスらの言葉は日本語と同じ精度で聞き取れて、ユーリから発話することもできた。明らかにおかしい。

(まさか、ライトノベルで有名な異世界転移?)

ユーリはあまりその系統の本や漫画は読まないが、何となく程度は知っている。

「アウレリウスさん」

必死で心を落ち着けて、ユーリは聞いてみた。聞く相手が皇子ではないのは、それまでの態度の問題である。

「ここは、私が元いた世界とは違う場所なんですか?」

「ああ、そうだ。ここはオプティムス帝国。内海を取り巻く史上最大の国にして、皇帝陛下と元老院が治める大帝國」

「オプティムス帝国……。初めて聞く国です。言葉もこの国独自のものですよね」

「その通り。——なるほど。異邦の旅人は門の神の祝福により、この国の言葉を理解できるようになっている」

アウレリウスはそう言っつて、懐からひと巻きの巻物を取り出した。

「文字はどうか？ 読めるか？」

「……読めません」

ユーリは巻物を開いたが、見たこともない記号が並んでいるばかりだった。

控えていた神官の一人が言った。

「異邦の英雄であれば、読めるはずなのですが。選定と異界の転送において、何らかの不具合が起きたようですね」

「その選定というのは、どういうものですか」

「門の神の御力により、異なる場所より高い素質を持つ者を呼び寄せる秘儀です」

ということとは、とユーリは思った。

最初に地面の光に呑み込まれそうになっていた、あの女子高生。あの少女が本来の『選定』を受けた者だったのだらう。

そこにユーリが割り込んでしまった。そのせいで、こんなことに。

「もし私が何か能力を持っていれば、どうになりましたか？」

「俺が望んだのは魔物と戦う方だ。魔物どもに打ち勝つだけの武力が欲しかった。そのような英雄であれば、俺とともに最前線へ出て戦い続けただろう」

皇子が答えると、アウレリウスも続けた。

「過去の英雄の中には、オペティムスにはない叡智えいちをもたらしただけの者もいるという。高度な知識や技術は、単純な武力以上に国の力となる。帝国お抱えの技士なり研究者なりとして、一生を仕えることになる」

(それ、どっちも都合よく使われるだけじゃない！)

ユーリは思わず心の中で叫んだ。

あの女子高生を助けられたのは、良かった。

でも代わりにユーリがここに来て、もう帰ることはできないのだという。

……理不尽だった。あまりにも。

明日も出勤日だったのに。

週末は実家に帰る予定もあつたのに。

それらの全てを突然、取り上げられて。

日本の両親や友人たちは唐突に行方不明になったユーリを探して、どれだけ心を痛めるだろうか。「帰る方法は、本当にないんですか」

石造りの建物にユーリの声が響く。反響は声の震えを隠してくれた。

「ない」

アウレリウスが言う。きっぱりと。

「過去の英雄の中にも、帰還を希望する者がいた。神殿は総力を挙げて方法を調べたが、ついぞ見つけれなかった」

ユーリはショックを受けながらも、言い返した。

「勝手に呼び出して、帰る道はないと言う。あまりに身勝手です」

「返す言葉もない。だが、今はそのような方法にすぎるほど状況が悪いのだ」

彼が言うには、この世界には魔物と呼ばれる害獣が多く住んでいる。

魔物はほとんどが人間に敵対的で、しかも好戦的。高い身体能力と魔力を持っていて、正面からやり合っては勝てない種族も多い。

そしてその魔物らが、近年非常な勢いで増えているという。

「……………」

彼らも必死なのだ、ユーリは理解した。

だけどそれでも、彼女は巻き込まれただけ。理解はしても呑み込めるものではない。

「とにかく、旅人殿には悪いことをした。今日はもう休んでくれ」

皇子が手を差し出す。

その手は取らず、アウレリウスの後についてユーリは歩き始めた。

ユーリは小さな部屋で少し待たされた後、夕食の席へ呼ばれて部屋を出た。

空腹は全く感じなかったが、部屋にいても仕方がない。

アウレリウスの案内で神殿の列柱回廊を通り、奥の扉を開く。

扉の先はやや広い部屋だった。正面には食卓が据えられており、さまざまな料理が盛りされていた。

「英雄選定の半ばの成功と、異世界の旅人殿との出会いを祝って、乾杯」

半ばやけっぱちのような口調で、皇子がワインの盃を掲げる。アウレリウスは形ばかり応えてみせた後、グラスに口をつけた。

「旅人殿の今後を決めなければ」

アウレリウスが言う。

「先ほども言ったが、今回の召喚は我々の一方的な都合に過ぎない。旅人殿の生活は保障するし、住む場所の希望なども最大限配慮しよう」

「ああ。魔物の脅威があるとはいえ、オプティムス帝国は豊かな国だ。皇帝の息子である俺の力をもってすれば、女性の一人くらいは贅沢な暮らしをさせてやれる。俺は現皇帝の第二子。次の皇帝に最も近いと言われている男だ」

彼は得意そうに言って、豚肉のローストをかぶりと囁みちぎった。

アウレリウスは肩をすくめる。

「皇帝の子は有力な後継者であるが、殿下はまだ実績が足りぬ」

皇子は反論しない。食べ盛りらしい旺盛な食欲を見せる彼に対して、アウレリウスは上品に食事

を進めている。

「誰にでも分かりやすく、かつ絶大な戦功が見込めると主張して、伝説に謳うたわれる英雄召喚を行ったのだが。結果はこのとおりだ」

アウレリウスの淡々とした言葉に、皇子は反論した。

「仕方なからう！ 一人の英雄が全てを解決すると思えば、どうしたってそちらに傾くだろうが！」

「実際のところ失敗したのですから、次の手を打たねばなりません。魔物の暴走がいよいよ起こるその日まで、兵を集めて砦とりでを整え、武器を整備し、食料を確保する」

「分かっている」

現実的なアウレリウスの言葉に、皇子は首を振った。

「俺は幼い頃から、門の英雄の話や寝物語に聞いて育った。その英雄の隣に立って魔物どもと戦えると思えば、心が浮き立っていた。だが、よく考えれば当たり前のことだった。異邦の者にもそれぞれの生活があり、家族がいたのだらう。無理に門を開くべきではなかった……」

呻うめくような彼の言葉に、ユーリは胸が痛むのを感じる。

ユーリが身代わりになったあの女子高生は、この世界で英雄になる素質を持った人だったのだらう。

子供が無理矢理に家族と引き離されて、見知らぬ世界へ連れてこられる。そんなことは間違っている。

けれど結果、無能のユーリが来てしまつて皇子は失望している。

ユーリは元の世界に、日本に帰りたい。

だが英雄の召喚を邪魔してしまつた責任を感じる。

彼女のスキルは『雑学』であるという。いかにも役に立ちそうもない名称だつた。

「旅人殿。手近な場所で良ければ、この町に住居を用意するが、それでよいか？」

アウレリウスが言う。

「信頼できる使用人を何人かつけよう。私の名義で月々の生活費も出す。故郷と勝手は違うだろうが、大きな不自由はないはずだ」

皇子も続けた。

「旅人殿、アウレリウスはこのアルビオン属州の北を守る第二軍団ドリファレガイトゥスの軍団長だ。アルビオンにいる以上は、属州総督などよりもよほど頼りになる相手だよ。任せておけば間違いはない」

愛想のない口調だったが、それだけに相手への信頼が感じられた。アウレリウスを見れば、顔色を変えずにワインを飲んでゐる。

ユーリが答えないまましていると、肯定と受け取つたようだ。二人はうなずいた。

「それでは、そのように。今日一日だけ神殿で宿を借り、明日になったら住居に案内させよう」

その言葉に、ユーリは二人の男性を見た。

「いいえ、待つてください」

ユーリは席から立ち上がる。

「勝手に決められては困ります。私はまだ、何も言っていないです」

皇子とアウレリウスが視線を向ける。

「まず、私はこの世界を何も知らない。魔物がどんな生き物なのかすら知らないんです」  
だから、とユーリは続ける。

「何も知らないままで決めてしまわないでください。それに私は、そりゃあ『雑学』しか取り柄のない一般人ですけど、大人です。自分の生活費くらい自分で稼ぎます」

言いながら、ユーリの心に一つの思いが浮かんでくる。

——日本で大学まで行って、就職して。代わり映えない日々だったけれど、ちゃんと働いて。私は一人前の大人だったはずだ。

急に連れてこられた異世界で、役立たずの烙印ろういんを押されるいわれはない。

たとえここがどこであろうと、私はまた仕事をして人の役に立つてみせる。

「私、働きます」

目を丸くする二人を交互に見ながら、ユーリは言った。

「日本では、前の世界では会社員をやっていました。事務仕事は得意です。体力だって、それなりにある方です。みなさんの役に立つ仕事がありました。事務仕事は得意です。体力だって、それなり」

皇子とアウレリウスは気圧されたように押し黙る。少ししてからアウレリウスが言った。

「しかしきみは不完全な門の選定で、字が読めないだろう。文字が読めなければ計算もできない。

事務仕事ができるはずもない」

「覚えます。会話ができるのなら、字を学ぶのもそんなに時間はかからないはず。それに計算は得意です。経理課ですから」

ユーリがにっこりと笑うと、アウレリウスは複雑な表情になった。しばらくの間をあけて、ため息をつく。

「そこまで言うのなら、いいだろう。私の軍団の本拠地であれば、こまごまとした仕事もある。早くに文字と数を覚えて仕事に出てくれ」

「はい！」

ユーリは思わず小さなガッツポーズをした。そんな彼女をおかしなものを見る目でアウレリウスが見ている。

「……何ですか？」

「いや。女性というものは、使用人に世話をされて生活の心配がなければ、それで満足なのだと思っていた。意外だ」

「私のいた国では、女性も働くのが普通です。みな、自分の能力を生かして仕事をしていますよ」

ユーリが当然の口調で答えると、彼は小さく首を振った。あまり納得していない様子だった。

「我が故郷、アルピオン北部は冬の寒さと魔物の脅威が厳しい土地。男が外で働き、女は家を守る。私はそのような環境で生きてきたのでな」

「……それもきつと、間違いではないのだと思います。でも私は働きたい。仕事を通じて自分の力をみなのに立てたいのです」

ユーリがきつぱりと言うと、アウレリウスは目を上げた。感情の薄い紫の目に見つめられて、ユーリはどきりとする。

こうして見れば、アウレリウスは非常に整った容姿をしていた。後ろに撫なでつけた金の髪は、ひとすじ額に落ちかかっている。紫の瞳は底が見えない湖のようで、燭台の光を受けて揺らめいていた。

しばしの沈黙が落ちる。やがて彼はユーリから視線を外して、口を開いた。

「それでは、旅人殿——」

言いかけた言葉をユーリはさえぎった。

「私はユーリです。山岡悠理。旅人ではなく、ユーリと呼んでください」

「……了解した。よろしく頼む、ユーリ」

「ユーリか。いい名だ」

口々に答える二人に、彼女は笑いかけた。

「こちらこそよろしく願います。皇子殿下、アウレリウス様」

不安が消えたわけではない。それでもユーリは笑ってみせた。

明日はもう今日の続きではなく、何が起こるかすら分からない。故郷に帰る日は来ないかもしれない。  
ない。

（転職より、婚活より、すごいことになってしまったわ！）

それでもユーリは前を向く。



孤独と寂しさに涙する夜を予感しながら、さらにその先の希望を見据えて。

(そう。こう考えましょう。私は引越して、転職をしたの。新しい職場でまた頑張らなければ)

そうしてユーリは決意した。この世界で生きていくことを。

🐾 北の要塞町 🐾

神殿で一夜の宿を借りたユーリは、翌日、初めて外へと出た。

神殿は公共回廊フオルムと呼ばれる広場の一角にある。まだ朝の時刻であるが既に人通りは多く、露店や屋台なども出されていた。

空気はそれなりに冷たい。どうやら今の季節は春の前半であるようだ。

「この町はアルビオン属州の州都。大陸本土の玄関口として、北の防壁との間をつなぐ重要な拠点だ」

アウレリウスの言葉に、ユーリは周囲を見回した。

行き交う人々は色素の薄い西洋人を中心に、雑多な人種が入り交じっていた。褐色の肌に黒髪とあごひげの商人や、黒い肌に縮れた髪の南方人。さすがに東洋人は見当たらないが、この様子であればユーリの容貌もそう目立たないだろう。

アウレリウスの先導で広場を出て、町外れにある軍の駐屯地まで行く。柵で囲われた敷地はかなりの広さで、宿舎が整然と並んでいた。

正面門まで行くと馬車が用意されていた。二十人ほどの兵士がその周囲に整列している。

「さて。俺はここでお別れだ」

皇子が言う。

「どうか達者でな」

「ええ。落ち着いたら手紙を書きますね」

「俺も手紙を書くよ。アウレリウスとユーリに、俺の活躍を知ってもらわないと」

「そういうことは、実際に活躍してから言っしてほしいものすな」

アウレリウスが言うと、皇子はむすっとした表情になった。

「まったくアウレリウスはいつも一言多い。ユーリ、気をつけるよ。こいつは口うるさいぞ。黙っていればいつまでもお説教をしてくるから、さっさと切り上げるのがコツだ」

明るい笑い声上がる。やがてそれがふと途切れて、出発の合図となった。

アウレリウスとユーリは、他の兵士たちと共に馬車に乗り込んだ。

「殿下。ご武運を」

馬車から身を乗り出して、アウレリウスが言う。

「ああ、お前こそ。無事でな」

馬車が動き出した。ガラガラと車輪の音を立てて進んでいく。人と町とが遠ざかる。

ユーリが最後に大きく手を振ると、皇子も振り返してくれた。

こうしてユーリたちは、北へと旅立った。

北の要塞町までは馬車で二週間ほどかかる。

オプティムス帝国は街道を始めとしたインフラの国。辺境であるアルビオン属州もしっかりと街道が通っていて、旅の心配はなかった。

道中でユーリは文字の読み書きを学んだ。アウレリウスが子供用の教本をくれたので、何度も何度も読み返した。

馬車はそれなりに揺れたが、ユーリは乗り物酔いに強いほうだ。いずれ板バネを導入して乗り心地の良い馬車を作りたいと思いつながら、文字の習得にいそしんだ。

そして北へ街道を進むこと十四日。暦は四月に入った。

ユーリが必死に学んで、基本の読み書きを覚えた頃。

一行は北の要衝、要塞都市ヴィンダニウムに到着したのだった。



ヴィンダニウムは町全体が軍団の駐屯地のような見た目をしている。

全体が城壁で囲まれた四角形の町は、だが、最大の特徴を郊外に置いていた。

「壁……？」

町の北側を見てユーリは眩くらいた。町の城壁のその先、数キロメートルほどの距離を空けて長大

な壁がそそり立っている。

壁は左右にどこまでも続いていた。ユーリは馬車から身を乗り出して眺めたが、右も左もどちらも終わりが見えない。午後の陽射しが防壁に降り注いで、時折きらりと反射していた。

「皇帝の防壁だ」

アウレリウスが言う。

「現皇帝陛下は北の要衝であるこの地を守るため、二十年の歳月をかけて防壁を建造された。以来、この土地の安全性は飛躍的に高まった」

「二十年！ かなりの距離の防壁ですね？」

「ああ。この土地はアルピオン島の中で、最も東西の距離が短い。約百二十キロメートルだ。東の海岸線から西の海岸線まで、途切れることなく防壁は続いている」

「百二十キロ……」

ユーリは呆然<sup>ぼうぜん</sup>として防壁を眺めた。壁は遠目にもかなりの高さがあり、上を兵士が歩いているの  
で幅もありそうだ。

それだけの土木工事を重機類がないこの国でやり遂げたなんて。

整った街道もそうだが、オペティムス帝国は土木工事を得意とする国であるらしい。

皇帝の防壁を背景に見ながら、一行はヴィンダニウムの町に入る。城塞都市の名にふさわしく、  
分厚い城壁に囲まれていた。

無骨な見た目の門は、しかし、意外に人通りが多い。商人らしき人々の他、革<sup>かわ</sup>鎧<sup>よろい</sup>や毛皮をまと

い、剣と弓矢で武装した人々の姿も見られる。

「あいつらは冒険者だよ」

馬車に同乗している兵士が言った。

「正規の軍団兵で手が回らない小規模な魔物退治や、北の魔の森での採集作業などを生業なりわいにしている。何でも屋の便利な連中さ」

ファンタジー物語につきものである冒険者は、ここではそんな扱いなのかとユーリは思った。

馬車は門を抜けて一列で進んでいく。

町の北側が軍団の駐屯地になっていて、多くの軍団兵が訓練に励んでいた。

司令部の前の中庭で、一行は馬車から降りた。出迎えを受けながら、アウレリウスを先頭に司令部に入る。

「ペトロニウス首席百人隊長ケントゥッリオ」

「はっ」

アウレリウスの呼びかけに応え、壮年の兵士が進み出た。褐色の髪に灰色の目をした、いかめしい雰囲気きんぎょの男性である。他の兵士よりも立派な装飾のついた鎧を着込んでいる。

「このユーリを冒険者ギルドに案内してくれ」

「かしこまりました。ユーリ殿、こちらへ」

「え？ あの、ちょっと待ってください」

「なにか？」

急な話にユーリが驚いて声を上げると、アウレリウスが振り向く。

「私の働き先は冒険者ギルドなんですか？ 軍団内ではなく？」

「そうだ。軍団よりも冒険者ギルドの方が融通がきく。先方に既に話は通してある。きみもやりやすいだろう」

いつの間に、とユーリは思った。旅の途中、伝令と何度も手紙のやり取りをしていたから、そのついでだろうか。

「そ、そうですか。あと、住む場所はどうしたらいいでしょう」

「ギルドの宿舎を手配済みだ。あそこは女性の職員もいる。こまごまとした話は、彼女らに聞くといい」

「はあ」

「さ、ユーリ殿。行きましょう」

ペトロニウスセントゥリオ百人隊長に促されて、ユーリはなんだか納得がいかないままに司令部を出た。

ユーリは馬車で来た道を徒歩で引き返していく。ペトロニウスの歩幅は広く、ユーリはついていくので精一杯だった。

ずっと馬車の旅だったので、こうして歩くと気が晴れるのを感じる。雑多で気楽な雰囲気のある町を、ユーリは進んでいった。

「冒険者ギルドは東地区にあります。もう少しですよ」

ペトロニウスが言った。その声音には多少の気遣いがある。

「すみません、お世話になってしまって」

「問題ありません。ユーリ殿のことは、遠方の土地から来た身寄りのない女性と聞いております」

「……………」

門の選定と異世界から来た話は伏せられているようだ。

やむを得ないか、とユーリは内心でため息をついた。そんな話を正直にしても、周囲を戸惑わせるだけだろう。

「軍団長は愛想のない方ですが」

ペトロニウスは続けた。

「一度引き受けたことは、最後まで責任を持って取り組まれます。ですのでユーリ殿も、困りごとなどがありましたら、いつでも相談にいらっしゃってください」

「ありがとうございます。私が嫌われているわけではないのですね」

「もちろん。軍団長の態度はいつもあんな感じですから。それにたとえ嫌っていても、責任放棄をするような方ではありません。ご安心を」

「あはは……………」

ユーリとしては苦笑するしかない。とはいえ、今のところ頼れる相手はアウレリウスしかいないのも事実だ。

何か問題が起きたときは相談してみようと思った。

そうしているうちに、冒険者ギルドに到着した。

冒険者ギルドの敷地は広がった。手前に本館があり、奥に倉庫が建っている。

倉庫の周囲では何かの作業をしているようで、何人かの人が物を運んだり作業台で手を動かしたりしていた。

ペトロニウスが本館の扉を開けると、中は活気に満ちていた。

入ってすぐ正面にカウンターがあつて、職員が受付をしている。左手の壁にはメモ書きのような依頼書が何枚も貼られており、物色している冒険者たちがいる。

「ペトロニウス様！ いらっしやいませ。今日はどんなご用件ですか？」

女性の受付員が立ち上がり、愛想の良い笑みを浮かべて近づいてきた。

「ユーリ殿を預かってきた。ギルド長はいるか？」

ペトロニウスが言うと、女性はうなずいた。

「はい、おります。ご案内しますね」

右手奥の階段を三人で上り、二階へ行く。ティララと名乗った受付員が扉をロックすると、中から野太い声が答えた。

部屋の中には四十歳前後と思われる大柄な男性がいた。長椅子に座っていたが、ペトロニウスの姿を見るとすぐに立ち上がる。

「おお、ペトロニウス様！ よくいらっしやいました」

「例のユーリ殿を連れてきた。後はよろしく頼む」

「アウレリウス様の件ですな。しかと承りました」

「うむ。ではユーリ殿、俺はこれで」

ペトロニウスはそう言つて、さっさと出ていってしまった。

「ようこそ、ヴィンダニウムの冒険者ギルドへ。話は聞いているぜ、ユーリさんよ」

大柄な男性がそう言つてニツと笑うので、ユーリは頭を下げた。

「山岡悠理です。よろしくお願いします」

「お？ なんだ、変わった挨拶だな。俺はこのギルド長をやっている。まあ気楽にしてくれ」

促されて差し向かいの長椅子に座る。

ティララがお茶を持ってきてくれた。温かい麦茶が、少し冷えていた体に染み渡るようだった。

「仕事が欲しいんだってな」

ギルド長は単刀直入に言つた。

「で、あなたは読み書きができて計算も得意と。願つたりの話だぜ。早速だが、ユーリには倉庫の管理を頼みたい」

「倉庫」

ユーリが敷地にあつた大きな倉庫を思い出していると、彼は続けた。

「あれは魔物や魔の森で採れた素材を保管しておく倉庫でな。見ての通りけっこうデカいが、最近

はあふれそうになってやがる。出し入れの効率も悪わるい上に、軍団や商店から注文があつても、納品に間違いが多くなつてきた。商売は信用が第一だからな。これ以上間違えてアウレリウス様からお叱りを受ける前に、なんとかしてくれ」

「なんとか、ですか」

「ああ、やり方はなんでもいい。倉庫部門の人員も好きに使つてくれ。頼んだぜ」

ギルド長はそれだけ言うと、ひらひらと手を振つた。話は終わりらしい。

ユーリはもつと詳しい話を聞きたかつたが、彼もよく分かつていないのかもと思ひ直した。一度倉庫で働いている人々に話を聞いて、それでも不足したら再度ギルド長に尋ねてみよう。

部屋を出ると廊下でティララが待つていてくれた。

「倉庫で働いてくれるんだって？ 助かるわ！」

ティララはにっこりと微笑む。こうして見ると、彼女はなかなかの美人である。金髪に大きな青い目をしていて、愛嬌あいきょうがある。年齢は二十歳前後のようだ。

ユーリとティララは廊下を歩きながら話をした。

「冒険者は、どうやって暮らしている人たちなんですか？」

「あら、そんなに丁寧しやんに喋らなくていいから！ タメ口でお願いね。名前も呼び捨てでいいわ」

ティララがウィンクをしてみせる。

可愛らしい仕草のティララに、ユーリも笑顔を向けた。

「じゃあ、普通に話すね、ティララ」



「うんうん！ 冒険者だけど、北の防壁を抜けて魔の森で魔物を狩ったり、素材を採集して納品して生活費にしているわね。特定の素材が欲しいと依頼が出るときもあるし、そうでなくても魔物狩りはいつでも歓迎だから」

「魔物狩り……。危険じゃないの？」

「もちろん危険よ。そんなに危なくない小さい魔物もいるけど、魔の森じゃいつどんな魔物に出くわすかも分からないもの。命がけよ」

「……………」

日本では考えられない仕事だ。

「ドリファ軍団は優秀な兵士の集まりだけど、人手とか予算の問題があつて、魔物討伐の依頼を全部こなすのは無理。そこで冒険者の出番ってわけ」

冒険者についての話はその辺りで終わって、ティララはギルド職員の宿舎について教えてくれた。「ギルド職員の宿舎は、この建物の裏手にあるわ。トイレはあるけどお風呂はないから、町の公衆浴場まで行ってちょうだいね。今日か明日にでも案内するから」

「うん、分かった」

「じゃあ、もっと詳しい話は今日の仕事が終わったらするわね。また後で」

話しているうちに階段を下りて扉のところまでやって来ている。ティララが扉を開けてくれたので、ユーリはお礼を言つて外に出た。

ユーリは辺りを見回して、倉庫の方へと歩いていった。

倉庫の周辺は何人もの人々が行き交っている。よく見ると敷地はさらに奥があり、作業台が並べられていた。

何の作業をしているのか確かめようと目を凝らして、ユーリはぎくりと足を止めた。

作業台に載せられているのは、大きなイノシシのような動物の死体である。やたらに真つ赤な毛皮が目につく。作業者はナイフを振るってイノシシ(?)の毛皮を剥ぎ、腹を割いて内臓を取り出して、どんどんさばいていく。

血は思ったよりも少なかったが、生肉の赤みと脂肪の白がとても生々しい。ついでに臭いも割とひどい。

「よお、嬢ちゃん。こんなところで何やってんだ？ 冒険者……じゃねえよな？」

不意に後ろから声をかけられて、ユーリは飛び上がりそうになった。

振り返れば、体格のいい男が人好きのする笑みを浮かべて立っている。まだ肌寒い季節であるにもかかわらず、半袖をまくりあげた軽装である。年齢は二十代前半くらいだろう。

他にも何人か、二十代から四十代くらいの男たちが荷物を背負ったり、荷車を押ししたりしている。皆、しっかりと筋肉のついた力自慢の男たちだ。

この男の足元には荷車があつて、両手のひらに乗るくらいの袋がたくさん積まれていた。どうやら丸っこいものが入っているようだが……。

「あ、はい。冒険者じゃないです。私は山岡悠理、ドリファ軍団の紹介で今日から倉庫で働くことになった者です」

「おお、アウレリウス様の！ まさかこんな細っこい女性だったなんてなあ。俺はコッタ、ここの倉庫の荷運び人だ」

「よろしくね、コッタさん」

「コッタでいいよ。こっちこそよろしく。さて、俺はこいつを倉庫に入れてくるから、ユーリはこの事務室に行ってくれ」

見れば倉庫の脇に小さめの建物が併設されている。あれが事務室だろう。

ユーリはコッタの荷物を見た。

「それは何？」

荷車を引き始めたコッタは、いい笑顔で答えた。

「ゴブリンの生首！」

「えっ」

「狩った冒険者が腕のいい奴で、頭皮に傷もねえ。これならいい素材になるぜ」

「生首ってあれですか。生きていたのを首をはねて殺しちゃったやつ！」

「そうだよ。殺してから首を切り落としたら、生首とは言えねえな。そりゃただの切り落とした首だな？」

「えええ……」

「おっと、そうだ、ユーリ。事務所に行く前に倉庫を見ておくかい？」

「え、はい……」

ユーリはかなりのショックを受けたが、今日からここが彼女の職場である。ぐっとお腹なかに力を入れて、コッタと荷車の後についていった。

コッタが倉庫に近づくと、仲間の荷運び人が扉を開けた。倉庫の大きな扉が、重々しい音を立てて開かれる。

ユーリは男たちが続いて、一歩、足を踏み入れた。

そうして入り込んだ倉庫の中は——カオスに満ちていた——。

倉庫の中は混沌に満ちていた。

ついでに悪臭にも満たされていた。

荷運びの男たちは慣れたもので、荷車の荷を解ほどいてさっさと倉庫へと運び込んでいく。ゴブリンの生首とやらは布で包まれていて、直接見えないのが唯一の救いだった。

ユーリは恐る恐るカオスの向こう側をのぞき込んでみた。

倉庫は入り口近くからして既に迷宮のようで、雑多に並べられた背の高い棚に何の規則性もなくモノが置かれている。

何やら枯れ木の枝のようなものの隣は、獣の牙。さらにその横に丸い石。全部むき出しの状態で、細かいものはかろうじて箱に入れられている。

少し奥に見える細長いアレはなんだろうか。指が六本ある手に見えるのだが、気のせいだろうか。



——深淵をのぞくとき、深淵もまたこちらをのぞいているのだ——  
ユーリの脳裏に、いつだったか聞いた言葉が蘇<sup>よみがえ</sup>る。

コッタたち荷運び人は少し奥まで入って行って、棚の下段に袋を置いた。乱雑に置くものだから時々棚から何かがコロンと転がり落ちる。

それを足先でひよいと押しつけて、次の荷物を置くのだ。押しつけた拍子にその奥の何かがガシャンと音を立てても、彼らはちっとも気にしていない。

漂う悪臭と相まって、ユーリはめまいを覚えた。

一歩下がって倉庫の扉にもたれかかる。

するとコッタが心配そうに言った。

「ユーリ、大丈夫かよ？ 顔色が悪いぞ」

「ごめん、ちよっとめまいがして」

「そりゃいかん。事務所で休んでいけよ。何なら今日は早引けでもいいだろ」

そう言われて、ユーリは甘えようかと思った。でもこのめまいは別に病気なんかではなく、目の前の惨状にショックを受けたためだ。

そしてこの惨劇の現場は今日からユーリの職場なのだ。初日から引き下がってなどいられない。

「大丈夫！ 外の風に当たればすぐ治るから」

「そうかい？」

「それで、私は何をすればいいのかしら。倉庫整理!？」

ユーリが全身に気合を入れ直していると、コッタは苦笑した。

「いやいや、あんたみたいな細腕じゃ力仕事は無理だろ。あっちの事務所にナナっていう事務員がいる。彼女から詳しい話を聞いてくれ」

ユーリはちよつと肩透かしを食らった気分になったが、気を取り直して事務所に行った。

事務所はレンガ造りの小ぶりの平屋である。中に入ると机がいくつもあり、若い女性が一人椅子に座っていた。

「こんにちは、今日からここで働く山岡悠理です。あなたがナナさん？」

「……………」

女性はちらりとユーリを見て、小さくうなずいた。

「何をすればいいか、ナナさんに聞くように言われたんですけど、どうしたらいいですか？」

「……………」

ナナはやはり無言である。

ユーリは少し不安になって彼女を見た。

ごく若い、少女とっていいくらいの年頃の人だった。たぶん十六歳か十七歳くらいだろう。緑色がかかった灰色の髪を肩の少し上まで伸ばしている。伏し目がちの瞳は睫毛に隠されていて、色合いはよく分からない。

困惑したユーリが立ち尽くしていると、ナナはようやく声を出した。

「ユーリさんの……席は、そこです」

示された机を見る。簡素な木製の机と椅子だった。

ユーリはそこに座ってみた。ナナを見るが、彼女はまたもや無言である。

ユーリは仕方なく立ち上がって、事務所内をあちこち見て回った。

書棚があったのでよく見てみると、中に収められているのは冊子ではなく巻物だった。ユーリは驚いてそれを手に取った。どこを見ても冊子というものがない。全て巻物である。

(どうして冊子じゃないの？ 文明レベルが古代っぽいから、冊子が発明されていない？)

巻物は素材の目録だった。

巻物なので、紙を少しずつつ引つ張っては先を読む。冊子に比べるとなかなか不便だ。

ユーリは既に読み書きは問題ないレベルになっていた。計算はもともと得意なので、それも問題ない。

手に取った巻物は魔獣型——四足歩行をする獣に似た魔物——の素材目録だったようで、色々な魔物の名前と部位が書いてあった。

ざっと目を通した後に隣の巻物を見ると、留め紐に表題が書かれたタグがついていると気づいた。別の一巻には『亜人型』と書かれている。開いてみれば、『ゴブリン』『オーガ』など日本でも聞いたことのあるような魔物の名前が連なっていた。

ユーリは書棚を見渡して、素材目録以外のものを見つけた。タグには今年の在庫表とある。

「……え？」

ところが在庫表を開いたユーリは思わず声を上げた。今はもう四月なのに、中身はほとんど真っ

白だったのだ。

先ほど見たばかりのカオスな倉庫が脳裏に浮かぶ。あれだけばんばんにあふれそうになっているくせに、書類の在庫表はほぼ白紙。これはいったいどういうことだろうか？

「ナナさん。この在庫表が真つ白なんですけど、どうしてか分かりますか？」

「……………」

ナナは小さく首を振る。しばらく待っても何も言わないので、ユーリが口を開きかけると。

「分からない……………です。あたしの担当は経理だけなので……………」

とてもか細い声だった。ユーリはなるべく優しい口調で言う。

「じゃあ、誰か分かる人を教えてもらえますか？」

「たぶん、ギルド長……………」

「分かった。聞いてきますね」

ユーリは内心でため息をつく。いくら担当違いとはいえ、同じ事務所内の書類がこんなことになっていて、気づかないはずはないのだけれど。

立ち上がって部屋を出る際、そっと振り返って見たら、ナナはうつむくように机に向かっていて。落ちかかって顔を隠す髪が、彼女の閉じた心を表しているようだった。

ユーリは冒険者ギルドの本館に戻って、再度ギルド長と面会した。

彼は「今日の仕事はそろそろ終しまいなんだがなあ」などと言いつつも、話を聞いてくれた。

「倉庫事務所で素材の在庫表を確認しました。これです」

ユーリが在庫表を差し出して切り出すと、彼は眉尻を下げて頭を搔いた。

「あ、あゝ。それなあ……」

歯切れの悪いギルド長に、ユーリは畳み掛ける。

「もう四月なのに、今年の分が真っ白なのは、どうしてですか？」

「スマン！」

ギルド長は長椅子からがばつと身を起こすと、ユーリを拝むようにした。

「見ての通りだ。正直に言うと、倉庫の在庫は誰も把握なんぞできちゃいないんだ」

「ええ？」

「十年前に皇帝の防壁——そう、町の北にあるとんでもなく長い壁だよ——が完成して、このヴィンダニウムの町は安全性が高まった。安全な拠点に冒険者たちが増えて、素材の買い取りも増えた。その頃からだよ。倉庫に素材を放り込むばかりで、だんだん中にどんなものがどれだけ入っているか、分からなくなっちゃったんだ」

「……………」

ユーリが思わず黙ると、

「……………」

ギルド長も天井を仰いでため息をついた。

部屋の中はしばらく無言が続いたが、いつまでも黙ったままでは埒が明かない。

「誰も在庫を把握していないのに、素材の注文が入った時はどうしているんですか？ どこに何が  
あるかも分かりませんよね？」

「コッタのような熟練の職員が、勘を頼りに取ってきている」

「カン」

「カンだ」

ユーリは頭が痛くなるのを感じたが、もう少し頑張ってみることにした。

「経理はどうなってるんですか。在庫と出庫の帳簿が合わない、書類が作れませんが」

「大手の魔道具商会や鍛冶かじギルドなんかだと、毎月の注文にそう大きな違いはない。必要とされる  
素材はほとんど決まっている。毎度同じ注文が入ったことにして、帳尻を合わせている」

ひどいものである。

ギルド長は肩身が狭そうにしながら続けた。

「一番デカイ問題は、ドリファ軍団からの注文だ。あそこは毎月、必要なものをきちんと調べて注  
文してくれる。だから細かく対応しなけりゃならねえのに、だんだん納品ミスが増えて、アウレリウ  
ス様にお叱りを受けるようになった」

そりゃあそうだろうなとユーリは思ったが、さすがに口には出せない。

「冒険者ギルドは軍団と同じ国の組織だ。とはいえ正規兵の軍団と、食い詰めた農民を冒険者に仕  
立て上げて働かせているウチとじゃ、立場が違いすぎる。もう限界なんだよ。」

なあ、頼む、ユーリ。あんたはアウレリウス様のお墨付きだ。この状況を何とかするために来て

くれたんだろう？」

「いえ、私は……」

「頼む、この通り！ このままじゃ素材の買い取り業務まで支障をきたしかねん。そうすりゃ冒険者どもは死活問題なんだ」

「う……」

ユーリは言葉を決まらせた。貧しい農村から出てきて、危険と隣り合わせで食い扶持ふちを稼いでいる冒険者たち。そんな彼らのこの先がダメダメな倉庫管理のせいで行き詰まってしまうなんて、あんまりだ。

「……分かりました」

ユーリは覚悟を決めてうなずいた。

「微力ながら、力を尽くします。まずは何から手を付けるといいか、ギルド長さんと相談したいのですが」

「おお！ 助かるぜ！」

ギルド長は顔を輝かせて膝を打った。

「やり方はユーリに任せる。何せ俺がギルド長をやっている間に、こんななつちまったからな。

アウレリウス様お墨付きの知恵を見せてくれ」

「いやあの」

「よっし、じゃあ今日の仕事はここまでにしとくか。いやー、首の皮一枚つながった気分だわ。良

かった、良かった」

ギルド長は機嫌よくワハハと笑って席を立った。

「明日からよろしく頼むぜ、ユーリ」

ボタン。彼が出ていって、ギルド長室のドアが閉じられる。

後に残されたユーリはぼかーんとした。

「えっ、何、今の。……丸投げ？ まるっと投げられた？」

今日は倉庫を見てめまいがして、めちゃくちゃな状況に頭痛がして、最後に丸投げである。盛りだくさんにも程がある。

ふと見れば、窓の外はそろそろ夕焼けが始まっていた。そういえば、ユーリの住む部屋もまだ案内してもらっていない。

事態は差し迫っているものの、ここまで来たら今日や明日に破綻するわけでもないだろう。

ティララに宿舍の部屋を聞いて、今日はもう休もうと思った。

「あー、なんか、すっごく疲れた……」

深い実感を込めて、ユーリはため息をついた。

夕方、ティララは親切に宿舍を案内してくれた。

「ユーリの部屋はここ。本当は二人部屋なんだけど、今は相部屋になる人がいないから、ユーリだけの部屋になるわ。寂しかったらごめんね」